

論文要旨

和辻倫理学における個性としての肉体の重要性―自然児の恋愛をてがかりに―

荒木夏乃

本論は、倫理学研究として、和辻哲郎（一八八九―一九六〇）の思想における「肉体」の重要性を提示するものである。彼における「肉体」とは、「個性」であり、それ自体が既に間柄的なものであった。この「肉体」という「個性」の重要性を訴えることによって、本論は以下の二つの目的を達成することが出来ると考える。第一に、かつて全体主義的だとされていた和辻哲郎の思想に、「個性」という観点から新たな可能性を提示できるということ、第二に、和辻の人倫組織論における、男女二人共同体の特異性を説明できる、ということである。

この目的を達成するにあたり、本論は、和辻の『倫理学』におけるいわゆる倫理学論と、『日本古代文化』などに見られる文化論を、関連付けて説明することが可能であるという立場を取る。『倫理学』における「人間」の「個性」の尊重、および人倫組織論は、『日本古代文化』における「自然児」の「自然性」を肯定する神話的解釈、および全体性への順従と背反を述べる神代史的解釈に、重ね合わせることが可能であると考えるのである。これを最もよく表すのは、双方における恋愛の議論である。和辻において恋愛は、「肉体」という「個性」が最も密接に関係しあい、かつ、人倫組織である男女二人共同体が含む連関の仕方である。よって、和辻の恋愛観を辿ることにより、前述の二つ

の結論を導くことが可能となるのである。

本論の独自性は、第一に、和辻倫理学における「個性」という語、および「個別性」という語の違いに注目したことであろう。前述したが、和辻の用いる「個性」という語は、既に間柄的なものであり、個別的全体的双方の要素を含むものである。従って、「個性」の重視は、人倫的に善を追究する和辻の姿勢と、並立すると考えられるのである。では、この「個性」を、文化論と倫理学論においてどのように検討していくのか。本論はその懸け橋となる要素として、「肉体」という「個性」を見出したのである。このように、「個性」と「肉体」を関連付けて取り上げたことが、第二の、本論の独自性であると言えるだろう。

本論では、和辻哲郎の倫理学論と文化論との対応を認めた上で、両者に共通して、「個性」（自然性）を肯定する視点と、人倫組織的に価値を判別する視点があったと考える。そして、前者における「肉体」という「個性」の重要性を示すことで、和辻の倫理学に「個」が重視された瞬間があったことを見いだすことが出来、かつ彼の男女観の特殊性を主張することも可能になる、と考えるのである。

第一章では、まず、和辻哲郎の男女観をヘーゲルのそれと比較する。ヘーゲルは、和辻が人倫組織論を構築するにあたり、参考にした人物である。検討の結果、和辻がヘーゲルとは異なる独自の男女観を持っていたことや、そこに息づく「肉体」の重要性を提示することができた。

第二章では、和辻が「恋愛」について語る著作に日本の古代文化に

関するものが多く、かつそれらには「自然児の自然性」や「自然に即する」などの語が登場することから、和辻における「自然」という語の理解を進めていく。特に、自然児の自然性の発揮がなされた「恋愛」に注目することで、『倫理学』での「恋愛」における個性論との関連を提示していく。

第三章では、「個性」が発揮された共同体として最も著しい「恋愛」の中でも、特に極まった例として、「情死」を取り上げる。「情死」は、「恋愛」における「死」であるが、和辻が恋愛論において特に熱意をもって取り組んだテーマであると考えられる。検討の結果、「情死」が含む「恋愛」と「死」という両方の要素において、「肉体」が重要な役割を果たしていることが分かった。

第四章では、和辻の個性論を確認する。彼にとって、「個性」は間柄的なものである上に、個人だけでなく、文化や、国民などの集団までもが持つものとして想定されたものであった。また、特に、恋愛論において「個性」とされた「肉体」に注目すると、和辻がそれを人格として扱う傾向がだんだんと強くなっていったことを指摘できる。

以上から、常に明確に認識できる「肉体」という「個性」は、認識することによって、他者だけでなく自分をも冷静に捉え、顧みる機会を与えてくれるものである、ということが分かる。その意味で、「肉体」は確かに、和辻倫理学における「個」の要素を捉えるキーワードになり得ると言えるだろう。和辻哲郎が、人倫組織において価値を判別する視点と並行して、この「個性」を肯定する視点を持っていたと言う

こと、そしてその「個性」に「肉体」が含まれ、重要な要素として価値を高めていったということは、和辻哲郎の構築した倫理学を検討するにあたって、今後ますます考慮されるべき問題であると考えられる。